ISAPH News Letter

アイサップ
ニュースレター

第28号

2017年12月5日発行

写真：ラオス　食事・栄養調査の様子

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health

AINプログラム：杉下理事による活動視察の報告

ISAPHラオス　**木村　江里子**

ISAPHラオス事務所は、2017年４月から公益財団法人味の素ファンデーションによるAINプログラムのご支援をいただき、栄養事業の強化を図っています。その一環として、東京女子医科大学教授であり、今年５月にISAPHの理事に就任された杉下智彦先生がラオスを訪問されました。

長らく日本の国際保健業界を牽引しておられる杉下先生が現地視察する貴重な機会ということで、今回の訪問に合わせてISAPHとして地域保健向上支援ワークショップを計画していました。ISAPHの事業対象村以外の３村を加え、合計６村の村落保健委員会とサイブートン郡関係者を招集して行うワークショップでしたので、当日参加予定の村人がちゃんと来てくれるのか、最後まで不安をぬぐえませんでした。

当日の朝。前夜の雨が影響して村人の集まりが悪く、開始時刻になってもまだ半数も集まっていない状況を前に、「これは大変……」と緊張が走りましたが、その後、悪路で到着が遅れたという農民が続々と到着し、何とか40分遅れでワークショップをスタートすることができました。

まず、杉下先生のセミナーからスタート。杉下先生のプレゼンテーションでは、ラジオ体操や日本のビデオなどを用いながら、日本がどのように地域・個人レベルで病気の予防･健康増進のために取り組んできたか、行政と住民が一丸となって取り組むことの重要性を訴え、参加者を鼓舞するセミナーでした。また、他の途上国諸国の例を挙げ、お金や物品がなくても、コミュニティーでできる活動について説明し、ラオスの村人に「健康は誰かが授けてくれるのではなく、各自が関心を持って取り組むことが重要であり、とくに栄養の改善においては、住民一人ひとりが生活の中で向上に努めることが基本となる」ことを伝える内容に、村民は熱心に耳を傾けていました。

その後、ISAPHがワークショップの舵取りをし、村人と郡・県保健局職員は４グループに分かれて、村にどのような健康や栄養の問題があるか、それらの問題を解決するためにどのような支援が必要か、という２つのテーマについて話し合いました。参加者は熱心に考え、それを付箋に書きだし、意見が出揃った後で優先順位を付け、最後にグループの代表が前に出てグループの意見を発表しました。このワークショップで、村の保健委員会は自分たちの村で必要な保健活動を把握していること、ただそれを実施するに至る知識やノウハウを持ち合わせていないこと、また、彼らは自分たちで自身の健康を促進できるという意識がなく、そのため地方行政や援助機関に依存しているということが分かりました。

対して、地方保健行政官においては、彼らが村民の健康を増進する役割を担っているということを完全に認識しておらず、村の保健委員会に対しても彼ら独自で保健活動を実施していけるだけの十分なトレーニングが行政から提供されていないことが理解できました。今回のワークショップはサービス提供者側と受益者側の双方の意見や感覚のくい違いが明らかになる、大変興味深いものとなりました。

今回の活動視察の総括として、杉下先生から食事・栄養、その他母子保健課題に取り組む住民や行政職員らの活動が、ISAPHが事業を展開する期間だけで終わらないためにも、全体の活動をさらに整理し、ISAPHが将来対象郡を退いた後も成果を継続させる戦略の必要性についてアドバイスを受け、今後の活動を形作るためのユニークなアイデアもいただきました。これらのアドバイスやワークショップで得られた知見を、今後ISAPHとしてAINプログラムはもとより母子保健活動全般に活かし、現地の人々の真のニーズに沿った持続発展性のある地域母子保健活動を展開していければと考えています。

杉下先生の参加者を鼓舞するプレゼンテーションの様子

ワークショップに真剣に取り組む村人たち

最後にグループでまとまった意見を発表

AINプログラム：住民の食生活の実態を知るために

ISAPHラオス　**佐藤　優**

「昨日、何食べた？」

皆さんはこの問いにどれだけ正確に答えられるでしょうか。ある人は、３時に食べたおやつを忘れて申告するかもしれません。ある人は、自分が思い出した量が実際に食べた量とかけ離れているかもしれません。

これまでISAPHラオス事務所が活動している地域では、子どもの低身長・低体重が問題となっていることをお伝えしてきました。これらは子どもが摂取している食事の結果として起こりますから、子どもたちの食事･栄養に問題があることは予測できます。しかし、具体的にそれがどのような内容であるのかは十分に情報がありません。そこで私たちは、AINプログラムのご支援による活動の一環として、子どもたちが毎日何をどのように食べていて、どのような栄養素が不足しがちであるか､また､それがどのような背景から起こっているかを知るために、食事・栄養実態調査を行うことを決めました。とはいえ、冒頭で質問したように、食事・栄養に関する調査はそんなに簡単なものではありません。そこでこの度、国立健康・栄養研究所の三好美紀先生にご協力いただき、子どもたちの食生活の現状を明らかにするために必要な技術や知識をご提供いただきました。どのように質問すれば、子どもたちが食べたものの種類や量をより正確に知ることができるか､たくさんのアドバイスをいただきながらアンケート用紙を作成し、調査に必要な器具を準備していきました。

この調査は時間的な都合で７月に行われましたが、７月と言えばラオスでは田植えの真っ最中です。「明日は子ども食事のことで質問があるから、畑に行かずに待っててね」と事前に連絡しても、住民にとっては生活が優先ですから、なかなか会えません。私たちが

食べた量が具体的に分かるように、食器を使って答えてもらっている様子

栄養事業のディスカッション

村の状況を視察する三好先生（奥）

活動する３つの村には、約300名の子どもたちがいますが､なんとか村落ボランティアの力を借りながら、約１カ月で調査を終えることができました。もちろん、これで全て終わりではありません。集めてきた情報は、子どもたちの摂取栄養素量を計算するために特別な分析を行う必要があります。三好先生には、ラオスまで足を運んでいただき摂取栄養素の分析についてご指導をいただきました。また、村の状況も一緒に視察することができ、これから村の子どもたちの食事・栄養の問題をどのように考えていく必要があるか、ISAPHの栄養事業全体についてもディスカッションすることができました。

今はまだ分析の結果が出ていませんので、住民の本当の食生活から明らかになった問題点は、また別の機会にご報告させていただきます。この結果は、今後、郡保健局のスタッフやカウンターパートに伝え、住民の食事・栄養の問題を一緒に考える土台にしていく予定です。本事業は食事・栄養をテーマとしていることから、住民の生活に直接的・間接的な影響を与える内容です。ですから、この調査を実施するには日本人の協力が必要だったとしても、我々の意見の押し付けにならないように、ラオスの人々を中心として事業を形作っていきたい、というのが私たちの想いです。

AINプログラム：昆虫食先進国、ラオス！

ISAPHラオス　佐藤　優

まず、タイトルをみて内心穏やかでなくなった方も多いのではないでしょうか。とはいえ、イナゴの佃煮など日本にも昆虫を食べる文化はありますし、現在、世界で20億人もの人たちが、2,000種類の昆虫を食べていると言われています。そして、私たちが活動するラオスにおいても、昆虫は日常的に食べられている「食材」の一つです。

AINプログラムよりご支援をいただき行っている栄養事業の活動の一つに、食用昆虫をテーマにした食料の安定供給の仕組みを作ることがあります。この取り組みはISAPHにとっても初めての試みとなりますので、本活動に関しては食用昆虫の専門家から協力を得るようにしています。この度は、日本の食用昆虫科学研究会（https://e-ism.jimdo.com/）の理事長、佐伯真二郎先生に実際にラオスに来ていただき、活動についてご支援をいただきました。

まず先生が気にされたのは、市場にどんな昆虫が売られているか。お昼に市場に行きましたが、昆虫は売り切れていたので翌朝6時に再び市場に行きました。カエルやバッタ、コオロギやヤゴ（トンボの幼生）やタニシなどが売られていて、それらは深夜や早朝に住民が畑や森で採ってきたものだそうです。しかし、全ての人が市場で昆虫を買って食べるわけではないようでした。次に、現地の人々がどんな昆虫をどのように食べているかを知るために、ISAPHの活動村に足を運びました。村には虫を捕るための罠を設置している家もあり、そこで話を聞くと、「この虫はクリーミーで美味しい」「この虫はいつも炒って食べるよ」「この虫は今の時期は卵があって美味しいね」「この虫は食べられないよ」と昆虫を食べるための知識がとても豊富なことに驚かされました。村人は日頃から昆虫を食べていて、親から食べられるものと食べられないものを教わってきたそうです。もしかすると、私たち日本人も昔はそういう知識を持っていたのではないでしょうか。開発が進むにつれてスーパーで買い物をするのが当たり前になり、これらの知識が廃れていったのかもしれません。そう考えると、ラオスはまさに、昆虫食先進国でした。

昆虫の意外な活用方法、佐伯先生手作りのバッタの糞を使った染め物

FAO（Food and Agriculture Organization of the United Nations）も、昆虫は食料供給の側面だけでなく、栄養価の面からも重要な食料であることを伝えています。ラオスにおいてはメコン川によって魚も豊富ですが、昆虫も色々な種類を食べていることが分かりました。しかし、問題がないわけではありません。これらの自然の食材は収穫も自然に任せる必要があるのです。たとえ食べたくて罠を仕掛けても、全く採れない日もあり、安定して供給することが難しいという現状があります。そこで佐伯先生から、昆虫を安定して食べるために、鶏や豚のように養殖をすることで彼らの食卓を強化する方策をご提案いただきました。ISAPHでは、これから住民の安定した昆虫食を支援するため、養殖事業にも力を入れていく予定です。事業の経過については適宜報告していきますので、どうぞ楽しみにお待ちください。

市場に行くと、魚などの食材と一緒に昆虫も売られている

昆虫の試食をする佐伯先生

サイブートン郡病院支援の進捗報告

ISAPHラオス　**木村　江里子**

母子保健事業の一環として、ラオス事務所はカムアン県サイブートン郡で今年６月末から郡病院母子保健サービス向上支援活動に取り組んでいます。今回は、その後４カ月の進捗についてご報告したいと思います。

ISAPHは郡病院支援を通じて母子保健サービスの向上を目指していますが、その切り口として、5S（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）に取り組む中で郡病院内の課題を洗い出し、その課題に郡のラオス人職員と共に取り組んでいくという手法をとっています。

5S活動に関しては、６月末に郡保健局長が全病院スタッフに対して活動開始宣言を行った後、まずは彼ら自身が自分たちだけで活動を進めていくための仕掛けをして、しばらく彼らの自助努力に任せてみました。その仕掛けとは、①大きな改善を見せたユニットには優先的に5S資材（本立てや引出し、整理用のかご等）を提供すること②ただし5Sに本気で取り組まないのであればISAPHはすぐに撤退することを繰り返し伝えてから事業地を離れるという作戦でした。

その後１カ月ほど経過してから郡病院を訪れたところ、１カ月前と比べて病院全体が大きな改善を見せていました。廊下に置かれていた大量のごみや医療廃棄物、埃をかぶった過去の患者データなどは全て一掃され、廊下には患者の家族用の長椅子が並べられていました。特に旧病棟の入り口正面の病院の印象に大きな影響を与える部屋は、以前は物が無造作に詰め込まれただけの物置部屋だったのですが、それがきれいに整理･整頓されたワクチン室に生まれ変わっていました。

その後、全病院スタッフでミーティングを持ち、各ユニットの順位を発表し、彼らの自助努力の成果を大いに称えました。普段競争意識が低く、努力しても褒められる機会が少ない病院職員は上位の獲得に顔をほころばせて喜んでいました。現在、上位のユニットから5S資材の提供を行っていますが、これにより彼らが各ユニットの改善について考えるようになり、今後も病院全体のサービスを向上させたいという意識が高まるよう、働きかけていく予定です。

手洗い場の設置

Before：倉庫のような状態になっていた旧病棟入口正面の部屋

After：整理整頓されたワクチン室に生まれ変わりました

その後も病院側が率先して病院入口にマットレスを設置し、施設の外で靴を脱いで裸足で院内に入るよう徹底したり、病院入り口に手洗い場を２箇所設置したり、より効率的に業務に取り組めるよう医療器材の配置換えをしたりと、自助努力による継続的な変化がみられています。

5S活動の目的は、職場環境の改善や業務の効率化により医療ミスを防ぐこと、患者の満足度を向上させることなどはもちろんですが、この活動によりスタッフ自ら職場環境・サービスを継続的に改善していこうとする意識を持ち、それを行動に移していくことが大変重要だと考えています。今のところ、その変化が見られているのは大変喜ばしいことですが、まだ活動は始まったばかり。現在までに見られている良い変化を継続・発展させ、その先にある母子保健課題に取り組んでいくため、引き続きISAPHとして彼らの自助努力を引き出す側方支援を続けていきたいと思います。

ラオス　新スタッフの紹介

ビライヴァン・ヴォラチャック

こんにちは。私の名前は、ビライヴァン・ヴォラチャックといいます。私には５歳と３歳の２人の息子がいて、タケクの町で家族と一緒に暮らしています。

私は大学で英語教師の資格を取り、５年間英語教師として働いた後、国際NGOで勤務し、カムアン県の農村部の人々の生活向上のための活動に携わりました。開発の仕事によって、私自身の生まれ故郷で人々を支援できることを大変誇りに思っています。2017年８月からISAPHで働き始め、ISAPHの母子保健事業のうち、主に２つの活動を担当しています。

１つ目は郡病院支援活動です。この活動は、５S活動を通して病院のサービスを改善することと、それにより病院に治療に来る来院患者数を増加させることを目的としています。カムアン県の村々では、村人は体調が悪くても通院したがらないことが多く、また、妊婦も妊婦健診や出産のためにあまり来院しません。そのため、上記の目的を達成させることは私にとってチャレンジですが、よい結果を達成するために郡関係者と共に働き、ミーティングでお互いの意見交換をすることに、大きな面白みを感じています。

２つ目の活動は村でのリボルビングファンド支援活動です。この活動は、対象村においてリボルビングファンドの新しいシステムを構築し、その運営支援をすることで、貧困家庭を含む全ての村人が融資にアクセスできることを目的としています。貧困家庭を含む村人が、このリボルビングファンド支援によって十分な食料を確保でき、子どもたちが健康でよりよい教育を受けられるようになることで、笑顔あふれる幸せな人生を送れることが私の願いです。

私はISAPHで勤務し始めてまだ３カ月しか経っていませんが、ISAPHで既にいろいろなことを経験し、学べていることを幸せに感じています。今後もさらに勉強し、私の業務スキルを徐々に向上させていきたいと思っています。

最後に、私はISAPHで働けること、そしてISAPHとラオス人の同僚が知識や経験を共有してくれることに深く感謝しています。できるだけ長い間ISAPHで働き、ISAPHがカムアン県で実施している全ての活動において良い成果を収められるように貢献したいと思います。

事務局からの報告

帰国のご挨拶

ISAPHマラウイ　**朴　正美**

2015年７月から２年１カ月、マラウイでの業務に携わらせていただき、この度８月に帰国いたしました。

振り返ると毎日が試行錯誤の日々で、ナショナルスタッフの皆とああだこうだ言っては、地域住民の皆さんを巻き込んで共に話し合い実行し、失敗して、新しい方法でアプローチして、ということをたくさん繰り返してきました。少しずつ地域住民の皆さんからの理解を得られ、時間はかかりましたが私たちの理想とするものをボランティアの皆さんと共に築いたことで、ようやく形作ることができました。理想といっても、私たちが考えに考え抜いた理想が必ずしも地域住民の方のそれではないこと、地域の方々が主体となって活動することが今後の持続可能性に大きく繋がっていくことを知ることができたのは、スタッフとの試行錯誤があったからです。私一人では到底思いつかないことが山ほどあり、皆と働きながらチームワークを学ぶことができました。ナショナルスタッフの皆には心から感謝しています。

イベントでISAPHのスタッフと共に

マラウイに携わったのは大学院での研究がきっかけでしたが、短期滞在・研究のみの目的では知り得ないことがあり、地域に密着してこそ得られる情報や知識、感覚の重要さを学んだ約２年の滞在となりました。

マラウイ滞在中に助言や激励をしてくださった日本人スタッフの皆様や、ときには激しく口論を交わしながらも共により良いものを作ろうと励んでくれたマラウイ事務所ナショナルスタッフ、マラウイで出会った近隣の住民の皆様、遠方からいつも応援してくれた家族と友人に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

アフリカ・マラウイ国の離乳食と母親の食事内容、そして栄養不足

ISAPH事務局　**村井　俊康**

ほぼ３カ月ぶりに私はマラウイのプロジェクト地域に戻りました。同地では乾季特有の土埃が舞い、雨季の間に成長したトウモロコシの収穫は既に終了していました。今年は不作ではなかったようで、主食であるトウモロコシの備蓄はまだ多くの家庭において残っているようでした。

マラウイ国では５歳未満児のうち37.1%が慢性的な栄養不足に陥っています。このような現状を打開すべく、ISAPHでは同国北部のムジンバ県において栄養プロジェクトを進めています。今回、私がマラウイへ出張した理由の一つは、現地の人々は何を食べて何を食べないのか、離乳食と母親の食事内容について調べてみることにありました。もっとも、これは口で言うほどに簡単ではありません。量を食べていない・十分なカロリーを摂取していないということを示すのは大変難しく、厳密にやろうとすればするほど、人手も費用もかかります。そこで、もう少し手軽に調査する方法が必要とされており、今回はそのような方法を実際に試してみることにしたのでした。

今回試した方法は、食物を12のグループに分類し（穀物、塊根・根菜、肉・臓物、卵、魚等）過去24時間以内にそれぞれの食品グループを摂取したか否かを調べるというものでした。６カ月以上２歳未満児を持つ母親30人に対して聞き取り調査を実施しました。その結果をランキング形式で紹介すると以下の通りとなります。

摂取していた食品グループのトップ５は【母親】①穀類、①野菜、③豆類、④油脂、⑤砂糖、【乳幼児】①穀類、②ミルク･乳製品、③野菜、③油脂、⑤豆類。30名すべての母親及びその子が穀類（トウモロコシ）を摂取していました。また、すべての母親が野菜（青菜等）を摂取していました。現地では青菜を油で炒めたものが好まれ、その味付けにはトマトが用いられることが多いです。調査対象児30名中29名がミルク･乳製品グループを摂取していたのは、母乳を同グループに含めたことによります。一方、油脂というのは、ここでは概ねクッキングオイル（ヒマワリ油を含む）のことです。

同様に、摂取していなかった食品グループのワースト５は【母親】①肉・臓物、②ミルク・乳製品、③卵、④コーヒー紅茶･調味料、⑤果物、【乳幼児】①肉･臓物、②魚、③卵、③コーヒー紅茶・調味料、⑤果物。

肉、卵といった蛋白源を摂取している母子は少なく、動物性のミルク（牛乳・ヤギ乳等）の摂取も少ない状態です。

以前のプロジェクトにおける調査でも乳幼児の間で蛋白質の摂取量が少ないことが指摘されています。今回の調査でも蛋白源である肉・卵の摂取が少ないことが分かりました。

このような場合、すでに家庭や地域にあるものを上手くバランス良く食べてもらうことが重要になります。反対に、例えば肉や動物性ミルクの摂取頻度を大きく増やすといったことは難しいと言わざるを得ません。もともと、その入手や保存に難しさがあるからです。一方、今回の調査で興味深かったのは、母親が摂取しているほどに乳幼児は摂取していないという食品グループがあったことです。これには豆類（大豆等）並びに魚が含まれます。母親が摂取できているということは、少なくとも食材は家庭内にあるということであり、これは私にとっては希望のように見えます。

収穫済みトウモロコシの家庭における保存方法

家庭における食事の一例

最近のできごと　2017年6月～9月

6月7日・8日	【ラオス】郡病院母子保健サービス向上支援：セバンファイ・ノンボック郡病院スタディツアーを実施
6月23日	【ラオス】郡病院母子保健サービス向上支援：5S活動キックオフミーティング・ワークショップを開催
6月26日~30日	【ラオス】AINプログラム：食事・栄養調査（調査員トレーニング＋プレテスト）を実施
7月5日~7日	【ラオス】AINプログラム：食事・栄養調査（本調査）を実施
7月25日~10月11日	【マラウイ】ISAPH事務局の村井をマラウイに派遣
7月28~8月9日	【ラオス】AINプログラム：食用昆虫科学研究会理事長の佐伯真二郎氏をラオスに派遣
8月6日~13日	【ラオス】AINプログラム：聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事の浦部大策氏をラオスに派遣
8月7日~20日	【ラオス】AINプログラム：国立健康・栄養研究所国際栄養研究室室長の三好美紀氏をラオスに派遣
8月31日・9月1日	【ラオス】東京医科歯科大学のスタディツアーを受け入れ
9月13日	【ラオス】村のリボルビングファンド支援：パーコーン村において全村民周知ミーティングを実施
9月21日	【ラオス】AINプログラム：第1回栄養事業委員会会議を開催
9月21日	【ラオス】3カ月定期活動会議を開催
9月22日	【マラウイ】チャンジョブ・ヘルスポストにおいて、iサイクル様のご支援により現地保健ワーカーのための活動拠点兼住居が完成、開所式を実施
9月22日~29日	【ラオス】AINプログラム：東京女子医科大学教授・ISAPH理事の杉下智彦氏をラオスに派遣
9月26日	【ラオス】サイブートン郡において地域保健セミナー・ワークショップを開催
9月29日	【ラオス】ISAPH主催によるラオス・保健医療分野（邦人）NPO・NGO情報交換会を開催

入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員　年会費：30,000円

一般会員　年会費：3,000円

【振込先】
郵便振込　口座名　特定非営利活動法人ISAPH
口座番号　00180-6-279925

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

特定非営利活動法人ISAPH

【福岡事務所】
〒813-0034
福岡県福岡市東区多の津4-5-13　スギヤマビル4階
TEL.092-621-8611

【東京事務所】
〒105-0004
東京都港区新橋3-5-2　新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188　FAX.03-3593-0165

E-mail　jimukyoku@isaph.jp
URL　http://isaph.jp/

ISAPHの役員名簿

役　職	氏　名	備　考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学　名誉教授
理　事	深見　保正	元福岡県企業管理者
理　事	浦部　大策	聖マリア病院国際事業部　部長
理　事	江藤　秀顕	神山復生病院　医師
理　事	渡部　和男	龍谷大学法学部　客員教授
理　事	杉下　智彦	東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座　教授
監　事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所　弁護士

【ISAPHニュースレター　第28号　編集スタッフ】
石原 潤子／磯 東一郎／乳井 昌史

社会医療法人
雪の聖母会

聖マリア病院

理事長：井手 義雄　病院長：島 弘志
〒830-8543　福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322㈹　FAX.0942-34-3115
URL　http://www.st-mary-med.or.jp

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative（赤ちゃんにやさしい病院）WHO・ユニセフ指定
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001認証施設
- ISO 15189認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設（一般病院Ver.6.0）
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病（後）児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。